

記者の取材よもやま話

今年も、例年発表している「公立学校女性管理職進出度の都道府県ランキング」をホームページにアップしたら、全国各地のメディアからいくつもの電話取材を受けた。その中で、私の年齢を尋ねる記者がいた。別に隠す必要もないから一応答えた後に、この研究調査の内容と研究者の年齢は特に関係ないと思うが、なぜ、そのようなことを聞くのかと反問した。すると、多少言いよどんだ後に、必ず聞くように言われているという趣旨の答えが返ってきた。多分、まだ記者経験の極めて浅い人だったのだろう。

今でこそ、この研究調査に関する取材の際に、私の年齢を尋ねる記者はあまりいなくなったが、発表を始めた10年以上前の頃には、年齢どころか、「生年月日は」と唐突に尋ねる者がそれなりの割合でいた。そのような記者は、年齢を言っただけでは満足せず、しつこく生年月日を聞き出そうとするのである。なぜそんなものが必要なのかと尋ねると、誕生日を越えると1歳増えるからだなどと言いわけをした者もいたが、取材している事柄を記事にするために必要な事項は何かをよく考えず、上役や先輩から一般的に教えられた取材マニュアルに機械的に従っているのではないかと思われた。

この進出度ランキング関連の掲載記事は、きちんと当方に送っていただいたものだけでも、これまでに百を優に超えているが、通常、私自身については氏名と所属と職名が記されており、時には専門分野が加えられている。しかし、先に記したとおり、記者に尋ねられたら年齢も答えてきたが、実際に私の年齢を記した記事を見たことはない。要するに、この研究調査の結果を伝える新聞記事としては不要な情報なのである。

まあ、あえて彼らの立場に立って考えれば、新聞社では事件や事故などを扱う社会部が教育関係の記事も担当している場合が多いので、経験の浅い記者は、事件や事故の取材と区別がつかず、やみくもに年齢や生年月日を聞き出そうとしていたのかもしれない。

もっとも、以上の話はすべて「公立学校女性管理職進出度の都道府県ランキング」の結果を伝えることを主目的とする記事の取材についてであって、私自身のことを伝えるのが目的で、それを承諾して取材される場合には全く別論である。

政府の「青少年白書」執筆チームの実質的な中心にいたときに、その内容に興味を持った記者から「ひと」欄で取り上げるべく取材されたのを皮切りに、働き盛りの頃には、私個人の著述を読んで私自身の一端を伝えようと取材を申し込まれることも、しばしばあった。そのような際には、年齢や経歴はもちろん、たまには家族のことも書かれた。私がそれを承知で話しているのだから問題はない。ただ、かなりの時間対面でインタビューを受けて、何段抜きもの大きな新聞記事や、雑誌なら数ページにも及ぶ記事の場合ですら、私の生年月日を尋ねる人はいなかった。

なのに、十年余り前、突然の電話取材で、内容と何の脈絡もなく「生年月日は」と問う記者には、唾然とした。しかも、それが一人や二人ではなかったのだから、ほんとうにあきれた。最近、大幅に減ってはいるが、昨年も1人いたので、まだ絶滅はしていない。

